

体系的翻訳論への一試論  
— 情報構造および関連性理論を中心に —

玉置 祐子

(イギリス・ウェールズ大学大学院スウォンジー校・翻訳研究科)

*Recently in Japan, especially in the last two decades, there has been an overall tendency of using grammatical analysis as translation techniques with an emphasis on the “flow” of the texts (Anzai 1995). However, these techniques are usually not theory-driven but rather based on personal experiences of renowned translators. This article offers an overview of two key theories in Translation Studies; i.e., the Information Structure, elaborated mainly by Firbas (1992) and Takami (1995), and the Relevance Theory based on the works of Sperber & Wilson (1986) and Gutt (2000). The aim of this paper is to show the importance of the information structure and the contextual effects in the principle of relevance. These appear to be highly useful and essential to elaborate theory-driven Japanese translation techniques, enabling translators to improve the quality of translation.*

## 1. はじめに

翻訳では「原文の理解」そして「自然な訳文」の作成が中心的な問題意識である。最近の日本でも体系的なアプローチを求めて「翻訳の理念や技術を説いた書物は、おびただしく店頭に並んでいる」(安西 1995: 011)。こうした「翻訳指南書」で扱われている翻訳技法を概観すると、(1) 原文の思考の流れを重視し(安西 1995、中村 2003)、(2) この思考の流れを日本語として「自然な」構造に移し替える(河野 1975、安西 1995)という2つの傾向があることが読み取れる。<sup>1)</sup>これは「(一方に)精密な構文分析を据え、もう一方の極に文脈や常識を配慮する全体感覚を据えることが必要」(柴田 2003)という翻訳理念と、ある意味共通しているとも言える。

しかし、これまでの翻訳技法で指摘されてきた「原文 / 訳文の流れ」の実体を理論的に説明したものは少ない。これは、英和翻訳技法を扱った日本語文献では、1 文単

---

TAMAKI Yuko. "Toward a Systematic Theory of Translation -- Focusing on Information Structure and Relevance Theory." *Interpretation Studies*, No. 4, December 2004, Pages 157-169

(c) 2004 by the Japan Association for Interpretation Studies

位の分析がほとんどで、2 文以上の相互関係により分析されるテキストには常に「流れ」が存在するという認識が欠けていたことを意味する。

本研究ノートは、翻訳技法を説く際に使われる「原文の思考の流れ」「訳文の自然な流れ」の理論的な裏付けを試みる。そのために、テキストに存在する流れを機能的構文論による情報構造の原則を使い説明する。ただし情報構造の原則は言語特有の構造を持ち、英語と日本語でも異なる特徴があることを念頭におき、この情報構造の原則を補完する形で、言語の枠を超えた認知・心理の理論である関連性の原則を導入する。情報構造の原則によりテキストの流れの実体をつかみ、テキストの流れをさらに認知の観点も取り入れて把握することの重要性を論じる。<sup>2)</sup>

## 2. 本研究ノートの位置づけ

本研究ノートの意義を明確にする上で、まず英和翻訳技法を説いた「翻訳指南書」を概観する。最近では英和翻訳技法を扱った書籍は技術関連から文芸まで分野別に多く出版されているが、ここでは一般的な英和翻訳を扱ったものを2つ取り上げる。

安西徹夫『英文翻訳術』(1995)は、文芸翻訳(研究および商業出版のため)から産業翻訳分野においても参考とされているものである。<sup>3)</sup> 安西は、「原文の流れ」に注目しているが、その理論的根拠については明らかにしていない。ナイダの『翻訳—理論と実際』(1973)および生成変形文法の基礎を導入し、これを原文分解および訳文再構成への参考としている(ibid:38)。翻訳技法の説明は、英語の文法規範に従い、英語の所有格、(無生物)主語、代名詞などに分けて紹介する構成となっている。英語文法上の分類によるので、原文はその文法事項を含めた1文だけを抜き出したものであり、原文および訳文の目的や前後関係についての説明はない。よって、原文の思考の流れを理解できないまま、訳文は原文の文法規範ごとに対処する技法になっている。

中村保男『英和翻訳の原理・技法』(2003)も安西と同様に、英文の文法規範に即した分類で事例を上げ、品詞転換や態の変換などを個別の翻訳技法としている。事例は1文を抽出したものが多く、文脈の説明は日本語で簡単に触れている程度である。また、国語力と英語力についての記述があるものの「情報の流れ」という視点を理論に扱っているものではない。<sup>4)</sup>

英和翻訳技法の指南書の特徴の一つとして、上述したような英文法事項に分けた内容展開が挙げられる。これにより、「原文を文法単位で分析」し、「原文の思考の流れを重視」と言いながらも、原文の思考の流れを原文の文法項目で置き換える機械的な操作となっている。

Translation Studies では、原文は文法レベルだけでなく、ミクロな語彙レベル(単語・熟語)からマクロなテキストレベルの次元で個別に分析し、テキスト言語学や語用論などの学問領域から援用した理論に基づいた議論が行われている。原文の思考の流れに注目することは、対象とする文の前後関係や文脈を含めた「流れ」を汲み取る

という意味で捉えられ、文法レベルよりマクロなテキストおよび語用論レベルの分析からの理論的裏付けが必要となってくる。よって、本研究ノートでは、これまでの英和翻訳技法では扱われることが少なかったテキストレベルおよび語用論レベルの理論に焦点を当てる。これは、多くの優れた英和翻訳技法を否定するものでなく、より体系的な英和翻訳技法を確立するための新たな分析レベルの導入を試みるものとなり、本研究ノートの意義の一つとみなすことができる。

また、本研究ノートは、英語から日本語へという言語を特定した考察の必要性からも意義があると言える。Bakerはポルトガル語、英語、アラビア語、中国語、日本語などの事例を取り上げながら、原文にある情報の流れを無視して翻訳すると不必要に情報の入れ替えを行うことになると警告し、各言語によってその手法が違うことを意識しなければならないとしている (1992:149)。またMundayも情報の流れは起点言語・目標言語により異なることを強調している (2000:89)。<sup>5)</sup> よって、英語から日本語の翻訳に特定した翻訳技法を理論的に議論することに意義があると考えられる。

### 3. 情報構造 / 情報の流れの原則

翻訳技法を学ぶ上では「原文の思考の流れ」をつかみ「訳文の自然な流れ」にすることが重要であるというが、ここで使われている「原文・訳文の流れ」とは何を指すのかについて、これまでの日本語による翻訳研究では明らかにされてこなかった。しかしテキスト言語学によれば、2 つ以上の文が集められると、その配置は伝達内容がまとめられテキストレベルで処理されるように行われる。そのためには、上述したような単なる文法および語彙によるまとまりで節を捉えるのではなく、伝達内容のまとまりとして考えることが必要である (Baker 1992 : 121)。これにより、節ごとの配置は伝達内容が連続した流れを持つことになる。

話し言葉では、この流れをイントネーション (音調) や強勢などの音声要素により新情報として区別し (Halliday & Hasan 1976, Halliday 1985)、書き言葉でもイタリック体や括弧・句読点を使って強調する伝達内容を区別する。原則として伝達内容は旧情報と新情報に分けられ、文法規則による語順を満たした上で意図的に配置される。したがって、このテキストの性質を考慮すれば、翻訳技法で重視されてきた「原文・訳文の流れ」とはテキスト言語学での「情報の流れ (Information Flow)」と同等の概念と捉えることはそれほど難しいことではないだろう。英和翻訳に限れば、英語の情報の流れをつかみ、日本語に自然な情報の流れを持たせることが、翻訳技法を学ぶ上での鍵となると言える。

#### 3.1 英語の情報構造

情報構造の観点からテキストを捉えると、節を伝達内容のまとまりと考えれば、その内容が円滑に伝えられるような配置が行われる。英語における情報構造の原則は、

通常、旧情報が先で新情報が後に来る構造になる (Baker 1992 : 145)。これは Greenbaum & Quirk (1990:395) の文末焦点 (end-focus) や文末重心 (end-weight) の原則からも裏付けられる。例えば、次の2つの文は、伝達内容自体は等しいが、情報伝達の観点から性質が異なる (Baker 1992 : 148 から引用)。

- a) Heseltine's appointment as Minister of the Environment came as no surprise.
- b) Heseltine has been appointed as Minister of Environment. This comes as no surprise.

a) の例ではすでに環境大臣に任命されたことは旧情報として扱われている。これが新情報であれば、英語では2文に区別し文末の要素として扱われなければいけないとされる。このように、英語では情報の重要度が低いものから高いものへと配置される。

英語の旧情報から新情報という情報の流れ、また重要度の高い情報が文末に来る文末焦点の原則は、英語の受身および後置文の分析からも裏付けられている。高見(1995)は、英語の情報構造を分析するために FSP のアプローチ (Firbas 1992) を用いて英語の受身文および後置文の情報要素を機能的に分類した。例えば、ある1文で表される情報には行為者や行為者の動作だけでなく、副詞句で表される時や場所の情報要素や、同じ副詞句でも手段や様態を表す情報要素がある。時や場所を表す情報要素は、通常、旧情報(重要度の低い情報)<sup>6)</sup>として主題となりうるので文頭に置くこともできるが、手段や様態の副詞句は重要度の高い情報であり新情報として扱われ、文末に置かれる (ibid: 137)。このように、重要度の高い要素とは、概して基本的に予測できない (unpredictable) 情報である。この中には、目的語、副詞的補部、長い修飾語、また先行文脈になく社会常識から判断しても意外で予測不可能な要素が挙げられる。英語の不定表現(冠詞の a/an など)も例外はあるものの予測不可能であるために重要度の高い要素として扱われているのは、Baker の考察と等しい (Baker 1992 : 148)。英語の新情報・旧情報を具体的な情報の機能に従って識別した高見の分析 (ibid : 153-54) により、新情報は重要度の高い情報として文末に配置されることが再度確認できる。

翻訳技法を説く際に重要視される「原文の思考の流れをつかむ」とは、情報構造から捉えれば、旧情報から新情報へと情報が流れる配置順序に注目していることを意味する。これにより、起点言語に存在する情報の流れを無視して翻訳し、不必要に情報の入れ替えを行う (Baker 1992 : 149) ことを避けることもできる。ただし、この情報構造は英語特有のものであり、英語と日本語の言語構造の違いも考慮すれば、言語ごとの異なる情報構造を認識しなければならない。したがって、原文の情報の流れを把握するだけでなく、それを訳文に反映させる方法は言語ごとに異なる特質を持つことも考慮する必要がある (ibid : 151)。Baker の例を借りれば、テーマ・レーマ関係を重視し文末焦点の原則を取り入れなかったばかりに、文頭が説明的で重く、文末が 1

語の動詞で軽い構造となった英語の文章は、文法的には正しくても情報伝達の観点から不自然で読みにくい英語となることを挙げている (ibid : 147)。この例は英語への翻訳での警告と考えられるが、本研究ノートでは日本語への翻訳に限った理論を扱うので、次に日本語における情報構造の原則について考察する。

### 3.2 日本語の情報構造

翻訳においては、原文の思考の流れを把握するだけでなく、それを訳文としていかに自然な流れを持たせるかが重要である。英和翻訳に限って言えば、英語の情報構造を正確に理解し、さらに日本語の情報構造に従って構成し直すことと言えるだろう。それには日本語の情報構造の理解が不可欠となる。高見は機能的構文論により英語の情報構造を受身文と後置文で分析したが、対比的に日本語の情報構造の分析も行っている (1995 : 221)。久野 (1978) を再定式化した日本語における情報の流れの原則は次の通りである。

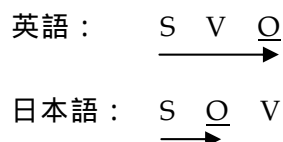
- 「日本語は、通例動詞の位置が文末に固定されているので、動詞が旧情報を表す場合には、その直前の位置が、最も重要な情報を表す要素のための予約席となる」(久野 1978 : 60) <sup>7)</sup>
- 「より重要でない情報からより重要な情報へ (情報は流れる)」(久野 1978 : 54)

日本語では、英語の情報構造と概ね等しく、情報の流れは重要度の低いものから高いものへと配置される。さらに、重要度が最も高い情報要素は、その位置が固定されている。

日本語の情報構造の原則は、日本語におけるテキスト研究 (庵 1997) や日本語のテーマ・レーマ構造の研究 (阿部 2002) からもすでに裏付けられている。日本語の性質により、動詞文、項をとる形容詞文 / 項をとらない形容詞文、名詞述語文など異なる情報構造が現れる場合もある。また文脈および語彙的結束性により、日本語では自由に語順の変更が可能であることも指摘されている (阿部 2002 : 276)。しかしテキスト研究およびテーマ・レーマ研究でも共通して「日本語では重要度の最も高い情報の位置は久野の原則に従っている」という見解で一致している。日本語への翻訳を行う際に「自然な訳文」を目指すのであれば、日本語の情報構造の2つの特徴を把握した上で、日本語として情報の流れが現れるようなテキストを心がけることになる。

### 3.3 情報構造と翻訳

英語と日本語の情報構造を概観すると、高見 (1995 : 244-48) の指摘によれば、次のようになる。矢印 (→) が情報の流れを表し、矢印の先端部が新情報のうち重要度の最も高い情報を表す。



翻訳技法を説く際に使われていた「原文の思考の流れ」「訳文の自然な流れ」とは、上図のような英語と日本語の情報構造を理解することを前提としていたと考えられる。この情報構造の理解は、すでに Baker (1992) でも指摘されているように、翻訳を単語レベルにとどまらずテキストレベルで考える上で重要な観点と言える。

ただし、情報構造を把握することは、情報の流れが旧情報から新情報へと流れることを認識するだけではない。情報要素がどのような機能を果たし、予測可能性に照らし合わせて重要度の高い要素を識別することが重要である。これは情報要素の配置順序だけの問題ではない。例えば、従属節として挿入する情報要素は、英語も日本語も聞き手にとっての旧情報と認識する (Baker 1992, Maynard 1981)。英語では不定表現 (冠詞の a/an など) を伴う情報要素は予測可能性が低いため、重要度の高い新情報であると認識されることは上述した。日本語で情報の重要度を明示する方法の 1 つに、格助詞「は/が」の働きがある。次の例では、情報構造は同じであっても、英語の不定表現の違いが日本語の格助詞の違いによって正しく差異化されていることがよく表れている (高見 1995 : 175 から引用)。

- 1a) **A** man who is carrying a large package is here.
- 1b) 大きな包みを運んでいる男の人が、ここにいます。
- 2a) **The** man who is carrying a large package is here.
- 2b) 大きな包みを運んでいる男の人は、ここにいます。

1b) の例では、格助詞「が」の挿入により、「誰が」の部分に情報の重要度が置かれている。文脈を考慮すれば、聞き手は「ここ」にいる対象の存在についてはすでに認識しており、その旧情報に対して「どのような人が」の部分为新情報として扱うことになると考えてよいだろう。この場合、旧情報から新情報へという情報の流れの原則に従っていないが、情報構造の観点から言えば原文の情報構造を正確に訳文にした例と言える。一方、2b) に見られる「は」の使用は、定表現として予測可能な旧情報としての扱いであり、重要度が高いのは「どこに」という後半部分である。

この 2 つの例文は、高見によれば「名詞句が聞き手に同定されているかに依存している」(ibid : 180) 例であり、2 つの原文に対する訳文はそれぞれ英語の情報構造を理解した上で日本語に適切に移し変えた例と言える。「は/が」の議論についてはテーマ・レマ構造において扱われることが多く (Baker 1992 : 142) 本研究ノートではこれ以上詳しくは扱わないが<sup>8)</sup>、情報の重要度の正確な理解が訳文の違いに現れていると言える。

翻訳技法を説く際に重要視されていた「原文の思考の流れ」「訳文の自然な流れ」の実体は、テキスト言語学の理論によればテキストに存在する情報構造であることが確認できた。そして英語および日本語では、概して情報の流れが平行していることが確認できた。しかし、テキストにある情報の流れを情報要素の配置順序だけで認識するだけでは不十分であることもわかった。不定表現のある英語原文の日本語訳では情報の流れの原則に従わない例もあったように、テキストにある節を伝達内容として捉え、異なる伝達内容を持つ情報要素を予測可能性に照らし合わせて重要度の高い情報と識別することが重要であることもわかった。

#### 4. 解釈的類似と文脈効果

伝達内容が言語の境界を越えて伝えられると、言語学的理由（語順や連語など）や社会文化的理由（原文の状況に精通しているかどうか、など）から、上述した予測可能性が高くなったり低くなったりする（Nida 1964：120ff）。これは英語と日本語の情報構造の原則の違いを理解しても、予測可能性を正確に把握することが難しいことを示している。ここで特定の言語に限られた情報構造の理解に共通していた予測可能性をより正しく理解するために、言語の枠を超えた理論を導入することが有意義であると考えられる。Nida によればこの予測可能性を補うことが翻訳者の使命であり（op. cit.）、Hatim & Mason も起点言語読者と目標言語読者の想定する予測可能性は同一とは限らないので、目標言語読者の認知環境を正しく判断して訳文にすることも翻訳者の技能の1つとしている（1990：95-96）。この予測可能性を、特定言語間のテキストレベルにとどまらず、言語の枠を超えた認知のレベルから再度検討することはより体系的な翻訳理論のために重要であると考えられる。

##### 4.1 翻訳の解釈的類似

同一言語内で同一情報を表現するにも複数の言語形式が存在する。人により表現方法は多様であるだけでなく、同じ人でも時や場所などの状況により表現方法を変えることもできる。この場合の状況とは、おもに話し手と聞き手（または過去の話し手自身）の関係により成り立つものである。しかしこうした多様な発話形式は特徴ごとに分類できる。そして翻訳をコミュニケーション行為と捉えるためにはどの分類に属するかを知ることが必要となる。

Sperber & Wilson (1986) は、コミュニケーションにおける発話の形態を「記述 (description)」と「解釈 (interpretation)」の2つに大きく分類し、これによりコミュニケーション行為を統一的に説明した。図1に従えば、発話は話者の思考を表象し、その話者の思考は記述と解釈の2つに分けられる。この記述と解釈はさらに4つのサブタイプ 現実の状況と望ましい状況、他者の思考と望ましい思考 に分けられる。このサブタイプを具体的な文形式に考えると、現実の状況とはいわゆる平叙文形

式、望ましい状況は命令文形式をとる。同様に、望ましい思考とは疑問文や感嘆文形式、他者の思考は引用やアイロニーがよい例となる。言語の使用が記述と解釈に分類できるならば、この分類によって翻訳の営みを説明することも可能となる。

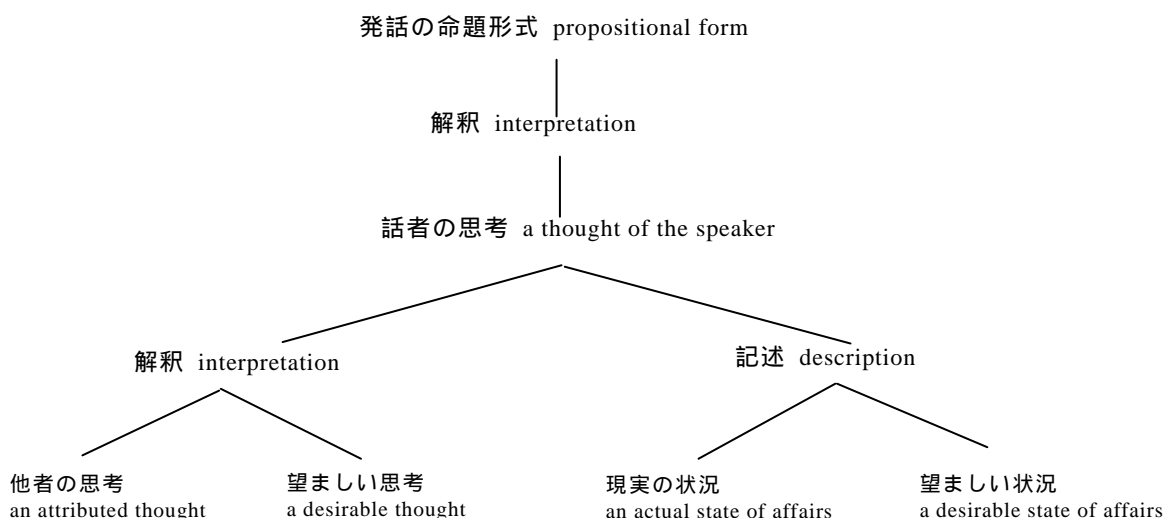


図 1. Sperber & Wilson による発話の形態  
(Sperber & Wilson 1986:232)

翻訳を認知・心理の理論から捉えると、どのような言語の使用と言えるのか。Gutt によれば、言語の解釈的使用のうち、翻訳とは異言語間における解釈的使用 (interlingual interpretive use) と特定できる。Sperber らの上図に従って翻訳を位置づけたのが図 2 である。この図から翻訳者を中心に据え原文と訳文の関係が位置づけでき、翻訳は起点言語の原文に解釈上類似した (interpretively resemble) 目標言語テキストとなる。ここでの解釈は、テキストの観点から、原文と訳文に表意 (explicature) と推意 (implicature) の共有性が見られることを指すが、認知の観点から解釈は関連性の度合いに依存し、その関連性は認知環境に依存している。この認知の観点では翻訳とは目標言語読者を考慮し、目標言語読者にとって最適の関連性があるような目標言語テキストとなる (Gutt 2000: 105)。逆に言えば、翻訳は最適の関連性を求めるためにある程度の制約を受けることにもなり (ibid : 106)、これが忠実な翻訳 (faithfulness) の概念を生み出す。忠実な翻訳とは関連性の原則の制約を受けることで成立する (ibid : 118)。翻訳を言語の解釈的使用と位置づけることで、翻訳には常に最適の関連性が存在していると言える。<sup>9)</sup>

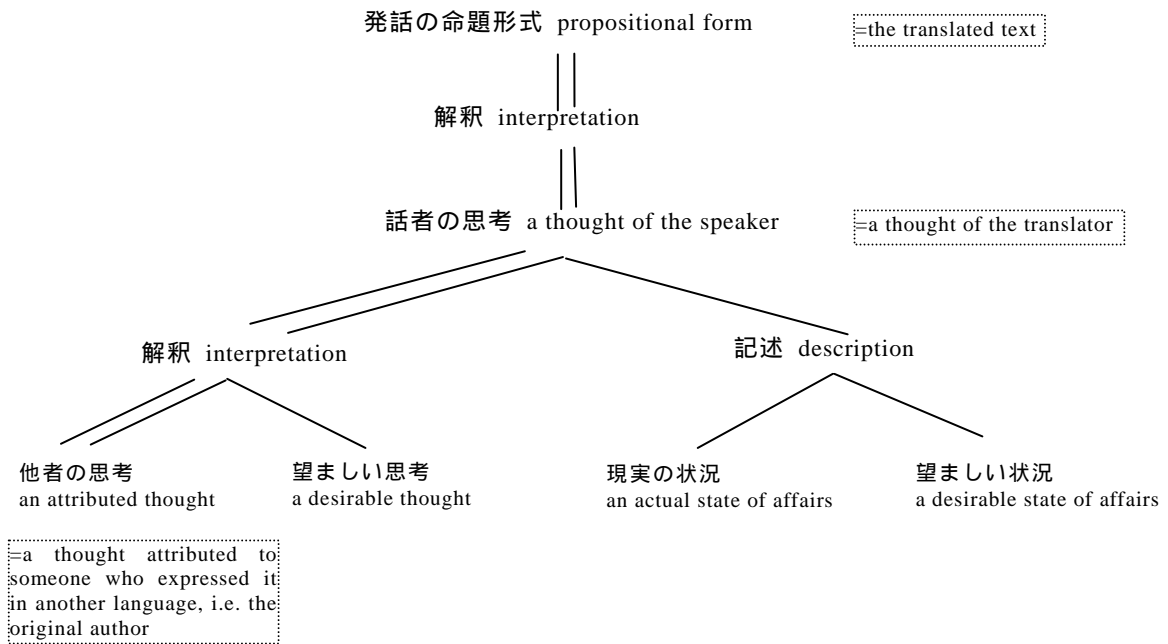


図 2. Gutt による翻訳の位置づけ  
( Gutt 2000 : 214 )

#### 4.2 翻訳と文脈効果

「翻訳テキストとは、原文に解釈の上で類似するものである」とは、テキストの受け手である目標言語読者にとって最適の関連性が存在することを意味する。最適の関連性とは、そもそも認知環境に依存するものであり計量的に考察するのは難しいが、Sperber & Wilson の関連性の原則によれば発話の文脈効果 (contextual effect) と聞き手の処理労力 (processing effort/cost) により計ることができる。したがって、コミュニケーションの文脈効果が大きく処理労力が小さい場合、関連性が最適であると言える。翻訳には最適の関連性が存在するとは、目標言語テキスト (訳文) の文脈効果が大きく、同時に目標言語読者の処理労力が小さいことを意味する。

上述した発話の文脈効果は、聞き手世界に関する想定 (聞き手世界の認知環境) に現れた改善によってさらに詳しく説明できる。聞き手世界の想定にもたらした変化の関係によって文脈効果を捉えることができるのである。聞き手世界を新情報・旧情報に区分した上でその関係の改善を考えると、大きく次の 3 つに分けられる (Hatim & Mason 1995 : 195 )。

- 1) 新情報が旧情報を再度肯定し強調する。
- 2) 新情報が旧情報を否定する。
- 3) 新情報と旧情報の結合により新たな文脈的含意 (contextual implications) を付加する。

翻訳に最適の関連性があるとは、上のいずれかの文脈効果が現れており、同時に処理労力が小さい目標言語テキストである。ここで文脈効果が旧情報と新情報の関係である点は注目に値する。聞き手世界の想定に関する旧情報・新情報という概念は、上述した情報構造における旧情報・新情報の概念と何らかの共通項を持つと考えられるのではないだろうか。Hatim & Mason が指摘するように (1990 : 215) 「想定 (assumption)」と「予測可能性 (predictability)」は重複する概念であることを考慮すれば、目標言語テキストに必要な情報の重要度を認識するために、文脈効果の概念を導入することで、理論的な裏付けを得られるはずである。

文脈効果をもたらす新情報と旧情報の関係については、上述した情報構造の理論では扱われていなかった。情報構造の理論では、原文の情報の流れに基づき重要度の高い情報要素を特定し訳文の情報の流れに従って反映させることはできたが、起点言語読者と目標言語読者の予測可能性および認知環境は同一とは限らないため、翻訳者の正しい判断が要求されていた。しかし、特定言語間の枠を超えて、翻訳を異言語間の解釈的使用と認識し、翻訳には目標言語読者にとって最適の関連性があることを考慮すれば、翻訳者は目標言語読者が情報の重要度を正しく認識するために、情報の重要度が生み出す文脈効果も考慮することが必要になると言えるのではないか。

これまでの個別の翻訳技法の根本には、情報の流れを把握することが重要視されていた。しかしより厳密には、起点言語テキストにある情報構造から重要度の高い情報要素を識別し、その要素を認知の観点から文脈効果が大きい目標言語テキストとなるように、目標言語テキストで情報の配置順序等を用いて重要度の高い情報要素を明示することが重要であると言える。文脈効果の概念は、情報構造の理論を認知の観点から補うことができると考えられる。

## 5. 結び

本研究ノートでは、翻訳技法を説く際に重要視されている「原文の思考の流れ」「訳文の自然な流れ」とは、情報構造の理論による「新情報・旧情報という情報の流れ」と考えられることを提案した。さらに、情報の流れを認識する際には、情報の配置順序だけでなく情報要素の予測可能性を考慮して重要度の高い情報と低い情報を識別することが重要であることを示した。しかし、予測可能性は起点言語読者と目標言語読者により同一とは限らないので、認知の観点から、新情報と旧情報が生み出す文脈効果を考慮することが必要であることを提案した。

これまで優秀な翻訳家の経験的知識により語られてきた翻訳技法として、(1) 原文を理解し (2) その中間訳から訳文を作成する、という2段階を意識するものが多くある。これは、本研究ノートで扱った理論に従えば、原文の情報構造を理解し、認知の観点で新情報と旧情報の文脈効果を把握してから、日本語の情報構造に再構成すると理論的に裏付けられるのではないか。今後の研究課題として、こうした優秀な翻訳者

による翻訳技法に頼るだけでなく、実際の訳文を集めて、この理論がどこまで適用されているか、この理論の妥当性について検討しなければならない。翻訳者の長年の経験としての翻訳技法と実際の訳文データを検証し、少しずつ理論的に体系化することで、今後、日本語での翻訳技法・原理の確立への一歩となり、いずれ翻訳者の助けになればと願うところである。

---

筆者紹介：玉置祐子 (Tamaki Yuko) イギリス・ウェールズ大学大学院スウォンジー校・翻訳研究科修士課程修了。修士論文は *Venuti's domestication and foreignization: A critical perspective in the translation of Japanese and Spanish*. 翻訳の容認性 (acceptability) について、イデオロギー的観点と語用論的観点に興味がある。現在、翻訳に従事しながら研究を行う。連絡先：ykrscwt@ybb.ne.jp

---

【註】

- 1) 1970年代の日本の翻訳理念の傾向については、古野ゆり「日本の翻訳：変化のあらわあれた1970年代」(2002)を参照。TouryのNormの概念に従い、訳者あとがき・翻訳関係者の意見に対する考察を行っている。
- 2) 南津(2002)は関連性理論を同時通訳の研究に適用し、認知語用論的観点から同時通訳における照応関係を統一的に説明している。水野(1999)は機能的構文論をもとに翻訳論を試みている。
- 3) 実務翻訳者の集まる社団法人日本翻訳連盟の機関誌『日本翻訳ジャーナル』No. 212 2004年7月/8月号「翻訳者のための書誌」にも取り上げられている。
- 4) その他、柴田耕太郎『翻訳力練成テキストブック』(2004)は原文のジャンル別に章立てしているものの、内容は whoever や if の理解など単語別・文法項目別に扱ったものである。原文の思考の流れに対する詳細な考察はないと言える。
- 5) さらに特定の言語間についての翻訳技法を論じた文献には、Hervey, S. (1995) *Thinking Spanish Translation: a Course in Translation Method, Spanish to English* がある。著者はこのほかドイツ語、フランス語、イタリア語から英語への翻訳技法も扱う。
- 6) 高見は新情報・旧情報という2項対立でなく、重要度の高い情報、重要度の低い情報という度合いに焦点を当てた用語を使用している(1995:139)。高見は新しい情報・古い情報という分類は、先行文脈ほか目標言語読者世界の想定にも依存することが多いとしているが、この2項対立の概念そのものを否定しているわけではない。よって本研究ノートでは新情報・旧情報という区分を用いているが、これは久野・高見の概念である情報の重要度の尺度も反映したものとして捉えてほしい。

- 7) これに並列した原則として省略がある。省略順序の原則「省略は、より重要度の低い要素からより重要度の高い要素へ、順に行く」により、情報の重要度は文法機能や格関係だけでなく語順によって決まる(高見 1995: 222)。省略順序の原則は、むしろ結束性、主題展開と関わり、本研究ノートでは扱わない。
- 8) Baker はテキストレベルでの等価性として、情報構造だけでなくテーマ・レーマ構造および結束性についても論じている。日本語における結束性の生成については、新情報を主題の斜格として挿入する方法(山中 1998)や、「あの/その」の使い分け、必須項をあえて出さないことで文連続に結束性を生む述語成分および 1 項名詞の用法(庵 1997、1998)などがある。英語と日本語のテーマ・レーマ構造の分析の翻訳への適用は、Naganuma (2000) にあるように論文の目的としてそれだけで十分有意義なものであり、ここでは扱わない。
- 9) 関連性の翻訳への適用については、おもに SKOPOS 理論からの批判がある。SKOPOS 理論では翻訳には複数の目的があり、優先順位により階層化される。Gutt の関連性は、優先順位を決定するための指標(どのように、誰により)が存在しないため翻訳には適用できないというものである(Malmkjær 1992)。

#### 【参考文献】

- 阿部聡(2002)「日本語における N-Rheme—書記テキストにおける具現と機能について」『現代社会文化研究』No. 25 pp. 267-28.
- 安西徹夫(1995)『英文翻訳術』筑摩書房
- 庵功雄(1997)「国語学・日本語学におけるテキスト研究」『言語とコミュニケーションに関する研究概観』pp. 1-23.
- 庵功雄(1998)「テキスト言語学の理論的枠組みに関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』創刊号 pp. 31-50
- 久野すすむ(1978)『談話の文法』大修館書店
- 河野一郎(1975)『翻訳上達法』講談社
- 柴田耕太郎(2004)『翻訳力錬成テキストブック』日外アソシエーツ
- 柴田元幸(2003)「『英和翻訳の原理・技法』の書評」『e-とらんず』、2003年6月号 p. 98
- 高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析』くろしお出版
- ナイダ E.A. (1973)『翻訳—理論と実際』沢登春仁訳、研究社
- 中村保男(2003)『英和翻訳の原理・技法』日外アソシエーツ
- 古野ゆり(2002)「日本の翻訳：変化の現れた 1970 年代」『通訳研究』第 2 号、pp. 114-122
- 水野的(2002)「機能的翻訳論への序章」『通訳理論研究』第 15 号、pp. 50-77。
- 南津佳広(2002)「同時通訳における照応関係の構築—指示表現「そういう」をてがかりに：認知語用論的観点からの統一的説明」『通訳研究』第 2 号、pp. 43-62。
- 山中桂一(1998)『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大学出版会

- Baker, M. (1992). *In Other Words: A Coursebook on Translation*. London and New York: Routledge.
- Firbas, J. (1992). *Functional Sentence Perspective in Written and Spoken communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenbaum, S. & R. Quirk (1990). *A Student's Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Gutt, E.A. (2000). *Translation and Relevance: Cognition and Context*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Halliday, M.A.K. (1985). *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976). *Cohesion in English*. London and New York: Longman.
- Hatim, B. & I. Mason (1990). *Discourse and the Translator*. London and New York: Longman.
- Hervey, S. (1995). *Thinking Spanish Translation: A Course in Translation Method, Spanish to English*. London and New York: Routledge.
- Malmkjær, K (1992). Review of Translation and Relevance by E. A. Gutt. *Mind and Language* 7 (3) pp. 298-309.
- Maynard, S.K. (1981). The given/new distinction and the analysis of the Japanese particles -WA and -GA. *Papers in Linguistics* 14, 1:109-30.
- Munday, J. (2000). *Introducing Translation Studies*. London and New York. Routledge.
- Naganuma, M. (2000) *Thematic challenges in translation between Japanese and English*. Unpublished M.A. Dissertation
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating*. Leiden: E.J. Brill
- Sperber, D. & D. Wilson (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Basil Blackwell.

